

## 壁画古墳

### 高松塚の感動

太田 康 和

三月二十四日早朝、信州での地質調査を終えた私は、雨の降る京都駅に着き、すぐ近鉄線に乗り換え奈良に向かった。大学が休みになるとかならず一度は奈良に来なくては気がすまない私なので、信州での調査の疲れも忘れ、ただただ菜の花がさきみだれる春の大和路を想像しながら、一人で見覚えのある窓外の景色をなつかしい気持ちでながめていた。奈良に近づくにつれ雨も

小降りになり、西の方が明るくなってきた。「ああ、もう晴れるなあ。さて、今日はどこへ行くか？ やはり橿原考古学研究所へまずは行って、遺跡の話でも聞こう」こう考えて、すぐ実行に移ったのであるが、この決定が、今考古学界戦後最大の発見として騒がれている高松塚壁画古墳発掘を見学できるといふ幸運のカギを握っているとは、私自身思いもよらなかつたことである。話が横にそれるが、私が考古学に興味を持ちだしたのは小学校五年の時であった。小学校の校庭で須恵器という古墳時代の土器を見つけ、それを当時、家の近くにあった関西大学の考古学研究室に持ちこんでからである。そこにいらした学生さんや教授の方に親切にしていたいただいたことをいいことに、毎週研究室に遊びに行くにつれて私の考古学熱も急上昇したわけである。そし

て当時やさしくしてくださった学生さんが、今では奈良県の文化財保存関係の仕事をされ、橿原研究所にいらっしゃるのだ。さて、なつかしさと期待に胸をふくらませて私は一年ぶりに研究所を訪ねた。中に入ると、なつかしい方々が昨年と変わらず親切に私をむかえてくださった。そしてこの一年間の奈良県下の発掘について種々うかがっている内に「今、明日香で古墳の発掘をやっている、今から見に行くんだが君もどうだ」という話が出た。私は二つ返事でおもしたということを言った。そのついでに「どんなものが出るんですか？」とたずねてみた。すると「ま、見たらわかるよ。大変なものが出るんだ」という返事だけで詳しいことは教えていただけなかった。私もおっしゃる通り、とうなずきそれ以上の質問

はやめ、はやる心をおさえて車に乗り込んだ。外はもうすっかり晴れて太陽がまぶしかった。

途中車の中で「大変なもの、大変なものってなんだろう？ 鏡でも多く出たのかな」などとその大変なものをあれこれと想像してみたが見当もつかなかった。やがて車の左前方に、文武天皇の御陵が見え、その手前の小高い丘の方を指さして研究所員の方が「あそこが発掘現場だ」といわれた。指さされた方向を見ると、林の中に白いテントが見える。あのテントの下に大変なものがあると思うと自然に胸が高なるのを感じた。車を文武天皇陵の前に止め、所員の方に続いてみかん畑の中を古墳に向かって歩いて行った。朝まで降っていた雨のため、道はぬかるみとなっていてはやる心とは反対に足が滑り、なかなか進めない。悪戦苦闘して

進むうちにみかん畑がとぎれ、急に視界が開けると同時に、小さな塚があったかも知れないとされているかのようにシートをかぶされて私の目に入ってきた。

「小さいけどきれいな古墳だなあ」。たしかに小さい。今までなら写真も写さないで通り過ぎてしまうようなどこにもある小円墳だ。でも、どことなく均整のとれた高貴なふん開気のただよった古墳だ。古墳に近づくにつれ、発電機の音が大きくなり私の興奮に拍車をかける。「あ、綱干先生だ。伊達先生もいらっしやる」私が防衛大に入校の一カ月前、藤原宮跡の発掘を手伝った時お世話になった先生方だ。所員の方があいさつされ、何やら打ち合わせをしている。その間私はあたりを見回した。「大変なものってなんだろう」また先ほどの疑問がわいてくる。古墳の脇に張られたテントの下に、何

やら木の箱に詰められ大事そうに保管されている。ビニールを通して見るとお棺のようだ。よくみるとまさしく乾漆棺の破片だ。「これで少し疑問がとけた。古墳でも時代が下り、飛鳥にふさわしい古墳だ」などと一人で学者きどりになっていると、綱干先生が「入、中で作業中だから見てもらえないが写真で我慢してほしい」と言われてアルバムを持ってこられた。私はさっそく見せていただいた。

一枚目は石室内を全体的にとったものらしい。大変なものはまだピンとこない。二枚目をめくり目をそそいだ。「あ、あ」とは口をあけてじっと写真に見入っているだけだった。そのうち体がふるえだし、わが目を疑いなん度もまばたきしてみた。「絵だ」それもお札にある聖徳太子のような人物がはつきり……。次々にページがめくられ、

婦人像、男子像、玄武、青竜、白虎などが表われる。説明してくださる綱干先生の声もうわずり、ふるえている。一通りアルバムを見終わってもまだ信じられない。「どうしてこんなものが……。大変なもの、大変なもの、本当にこんな大変なものがこの小さな塚の中にあるのだろうか」体がふるえ、発電機の音が遠くで鳴っているように聞こえて、しばし私の回りの時間がとまってしまったようだ。次に感じたのは、一目でいいからこの壁画を見たいという欲望であった。写真ではまだ信じられない。本物を見たい。そう思ってふたたびアルバムに見入っていると「それじゃあ、少しだけのぞかせてあげよう。作業中だからちょっとだけ」といって綱干先生が発掘穴の方へ私たちを案内してくださった。所員の方々に続いて、一步発掘穴へ近づいた。足が宙に浮い

ているようだ。「壁画が見られる」そう思っただけでも足がガタガタふるえる。

背をかがめてシートの中に入ると、シートを通して入ってくる光が古墳の赤土に反射して、人々の顔を赤く染める。皆の顔色は興奮による紅潮と、反射による赤みで無気味な色をしている。

発掘穴の一番奥に穴のあいた岩が見え、その穴を通して石室内で作業をしている人の身体が見える。そーっとしゃがんでその穴から中をのぞいてみた。

「ああ、本当に絵が書いてある」

まず奥壁の玄武の図が目に入ってきた。皆と顔を見合わせ、またすぐ石室内に目をやる。少し冷静になり壁画をみた。向かって左側の奥（後にわかったのだが西壁の婦人像）に一きわみずみずしい緑色の色彩がある。よく見ると緑色の服を着た人物像だ。「なんて美

しい緑色なんだろう」この緑色が千数百年前のものだとすることをだれが信じられるだろうか。それほどみずみずしいのだ。右の壁を見る。こっちにもある。人物が並んでいるのが見える。でも左の壁の緑に心が奪われているためか、はっきりとした印象が残らない。どうしても緑が目がすいよせられる。

あまり長くいると作業の邪魔になるので、早々に穴を出た。ほんの四、五分間の見学であったが、とてつもなく長い間穴の中にいたような気がして疲れさえ感じた。印象が強烈すぎたようだ。時間がたつにつれ、大変なものという意味が実感としてわいてきて、いつまでも体のふるえが止まらなかった。私は壁画を見ることができた、という満足感に酔いながら、少し距離をおいて、小さいが、**大・変・な・もの**を持っている古墳をながめてみた。「いったい誰の古

墳だろう」、素朴な疑問がわいてくる。

「すぐ南には文武天皇陵があるし、五百メートル北には天武、持統天皇陵、とするとやはり皇子か皇族の墓か？」

それとも宮廷の要人か？」「天武、持統、文武天皇に關係があり、古代史の重要人物なら草壁皇子か……」私はしろうとであり、学者でないがため、自由に、そして無責任に考え、また想像できるという特権を生かしている想像してみた。私は古代史のなかで、大津皇子と草壁皇子の間の皇位継しように関する争いの物語が好きだ。大津皇子の悲劇的な死にあわれさを感じるのだ。だから何の学問的根拠なしに大津と草壁の名が頭に浮かんだ。この古墳の被葬者は私の想像とは何の關係もない人かもしれない。しかし当時の風俗、服装はこの壁画の人物像と大差はないであろう。草壁皇子も大津皇子も、この壁

画のような服装をして飛鳥の里を、そして藤原の宮をかつ歩していたことであろう。私が奈良にひかれるのは、大津皇子の物語を始めとして、古代史に出てくるさまざまな出来事が、この地を舞台にくり広げられたからである。

古代史の舞台になり、今は田畑や荒地となつてしまつた宮跡や寺跡に立ち、当時を空想することのなんと楽しいことか。そしてそれはしろうとの特権だ。専門家となると、私のようにただロマंचシズムに酔つたような空想、想像はゆるぎない。学者とはそれであるがゆえに尊く、また学問的に疑問を解決するという、私の空想とちがつた楽しみがあるのだろう。

高松塚を見学した帰りに、私は飛鳥の里を散歩してみた。今まで以上に飛鳥が身近に感じられる。当時の人々の服装があざやかに心に残っているから

だろう。遺跡に立つとあの緑色の人物像がまた頭に浮かぶ。

高松塚の壁画は、私の空想に必要な新しいデータを吹き込んでくれた。

私の空想が、いっそうリアルに、そしてさらに楽しいものとなつたのだ。

新聞によると、壁画の色が日一日と色あせていつていっているそうである。たしかに新聞写真で見るとあの婦人像の緑色は、私がこの目で見た色とは全然違つたものになつてしまつていいる。どうかこれ以上、あの緑をあせさせてほしくない。

壁画の完全保存を望むと同時に、私の心にこの青春時代に受けたさまざまな感動が、年とともにうすれないようにと祈るのである。(防衛大学)